

1931年12月10日の高田博厚 —— ロマン・ロランに見せたその素顔 ——

高 橋 純

彫刻家高田博厚（1900-1987）は1931年に渡仏して後、途中一時帰国することもなく、1957年に帰国するまでの26年間をフランスで過ごした。当初は自身も、経済的な余力を考慮しても3年程度の滞在は可能と見ていた。しかしその後の貧窮も帰国の動機となることはなかった。また第二次世界大戦の勃発によって日仏両国が敵対関係になるとほぼすべての在仏邦人が帰国したにもかかわらず、高田は日本の新聞社の特派員の肩書を得てフランスに留まった。さらに終戦後ドイツで戦争難民の辛酸を舐めた後に自由の身になっても、日本に戻る道を選ばず、独りパリに向かい、結果、1957年に最終的に日本への帰国を果たすこととなった。

その高田は渡仏前の時期に以下のような体験をしていた。1929年のことである。このころ高田は、「人間的にはアナキスト」であり、自分が「マルキシズムに加担するのは、社会認識として」というように自らの思想信条を語っていた。つまり積極的に社会変革活動を目指す組織に加わっていたわけではなかった。しかしその巻き添えを食うことになったのだった。

ある日東京に出て戻ってくると、妻が玄関に飛んできて、「無産者新聞の人達が、発行所を急襲されて、逃げてきた。いまアトリエで新聞の秘密発送をやっている」と言う。アトリエには四、五人私の知らない若者が新聞を小包のように荷造りしている。普通小包のように見せかけて、方々の郵便局から地方の秘密支部へ送るのだという。私は近くのそば屋からどんぶり物をとって、皆にもてなし、夜の十時頃、「明日も来さしてください。もし来なかったら、僕たちは捕まったものと思ってください」と言って帰った。翌日誰も来なかった。その翌日一人が訪ねて来て、「皆捕まりました。しかしあなたに御迷惑はかけません。一昨日、お許しも得ないで、皆が押しつけてきたのは、踏み込まれる寸前、高田のおおじさんのところなら大丈夫だ……と逃げだしてきてしまったのです……」彼が一人でまた小包作業をやるのを、私も手伝った。そしてこの男も次の日には来なかった。いずれ私のところも踏み込まれるのだろう。残された新聞はまだ多量にある。私はひとりで丹念に小包みにし、人が来ると手伝わせた。中原中也も藤原定も来た。そして手分けして郵便局に持って行き、送り先の名簿は破れた唐紙の穴の中に隠した。残った新聞はまだ千枚ほどあったが、アトリエに粘土をしまう地下貯蔵庫があり、その中に隠して、むしろで覆った。（高田博厚『分水嶺』岩波現代文庫、2000年、p. 15）

その後高田は、そのような出来事を知らない高村光太郎に誘われて赤城に遊山に出かけ、帰宅後数日すると、ある朝特高が訪ねてきて、杉並署までの同行を求められるに至る。

もちろん後の成り行きは承知しているから、妻に「しばらくは帰れないよ」と言い残して、ぞろっとした姿で自動車に乗せられた。／そして杉並署に連行され、そのまま「豚小屋」に入れられた。はじめてみる留置場だが、どんなものかは前から知っていた。六、七人先輩がいるが、軽犯罪の者らしく、私が丁寧に挨拶したら、皆がまごついてた。そういう仕きたりではないのだろう。若い青年一人、すぐ政治犯つまり共産党とわかった。これとは直ちに話が通じた。やがて引っぱり出されて、「ただ君があいつらをかばって、後からやったことが憎らしいから、三週間の拘留にする。これは警視庁の命令なんだ」と言い渡された。(同18ページ)

こうして、三週間の留置場暮らしの後解放された高田は、それまでは経済的な理由で考えることもしなかったフランス行きを思い立つ。そして自分の作品の頒布会も企画して渡航の資金集めまで実行する。そこで1930年9月を出発予定とし、シベリア鉄道経由で安価な洋行を想定して当時の東京府にパスポート申請を出す。前記引用の「前科」(起訴されてはいないが)のせいで要注意人物とみられているために却下される。それでもなお、伝手を探し、保証人を付けて再度の申請を試みた結果、「シベリア経由でロシアを経由しない」という条件付きで渡航の許可が下りた。そして1931年2月に日本郵船の「靖国丸」の特別三等客として洋行することとなったのだった。

当時の船旅であれば日本からフランスまでは一カ月以上を要したから、スエズ運河経由でフランスはマルセイユに上陸したのは同年3月下旬となった。これ以後長らくフランスに暮らして得た様々な体験については、高田自身が回想録『分水嶺』で語っているところである。中でも一般によく知られ、高田自身にとっても重要な意味を持った体験が、インド独立の父、マハトマ・ガンジーとの出会いだった。1931年12月のことである。それは、ガンジーが英国からの帰途、当時スイスはヴィルヌーヴに住むロマン・ロランを訪問した時に、ロマン・ロランが、このガンジーに合わせるために、パリからヴィルヌーヴへの旅費を与えてまで、高田ただ一人を招いたという逸話として知られている。しかしこの逸話をわれわれ読者が知るのには、回想録での高田という当事者の証言を通してのみなのであって、それだけでは、世界中に名の知れたロマン・ロランとガンジーという巨人同士の会見になぜ無名の日本人高田が同席を許されたのか分からないばかりでなく、高田の回想自体がどこまで真実であるのかも判然としないと言わざるを得ないのだ。こうした漠然たる疑念が解消できたのは、まさにロマン・ロランが自身の日記にこの時の高田「招聘」の顛末を書き留めていたからこそである。この日記はロランの生前には公表されなかったが、作家の死後、彼の日記と書簡の中からガンジーとの交流に関わるものが編纂され単行本として世に出た時に、ロマン・ロラン自身の証言を通じてその経緯は明らかとなった。(Romain Rolland, *INDE, Journal 1915-1943*, éd. Albin Michel, 1960)

1931年12月——ついにここ数日以内に、はるか以前に公表されながら繰り返されてきた、ガンジーの当地訪問が実現する。この訪問がひと月もふた月も遅れたのは、ロンドンでの協議の円卓会議がいっこうに進展しなかったからだ(そしてまたこのたび重なる遅れは我が妹の疲労を募らせる原因にもなっている。彼女は以前からヴィルヌーヴを離れたがっていたのに)。——ミラ(ミス・スレイド)[ガンジーの秘書の英国人女性]

を介して、山ほどの郵便や電報をロンドンとの間で交わさねばならなかった。——さらにまた、ガンジー到来に関わるありとある種類の、これまた無数の手紙、電話、申し入れを相手にしなければならぬのだ。その中には、異様なもの、突飛なもの、気違いじみたものまである。(あるイタリア女性は、次のロト宝籤の十ヶタの当選数字を知りたいがために、私の伝手でガンジーに手紙を書いて尋ねたいという始末だ…) ドイツ系スイス人“ヌーティスト”たち(ヴェルナー・ツィンマーマン)がガンジーを自分たちの虜にしたがっているというので、これを防がねばならない。“神の子”と称する頭のおかしな連中が、カタツムリよろしくぞろぞろとまさに地中から現われる。善男善女の一団が、マハトマの窓辺の下で夜な夜な笛とバイオリンの小曲を奏でて差し上げましょうと申し出る。“レマン湖酪農組合”が、電話越しに威儀を正して、ガンジーの滞在中、“インド王”にも引けを取らぬ“食糧補給”を請け負いましょうと言ってくる。新聞社がこぞってやって来て、街の周囲に野営する。ローザンヌ警察本部は不測の事態に怯えている。ヴィルヌーヴのホテルは、風変わりな異国の賓客を一目見ようという“うるさ方”たちで溢れている。ならば私は、あの若い日本人彫刻家高田にパリから来る旅費を与えて、ガンジーに会わせ、スケッチをさせてあげることしよう。

ガンジーは十二月五日土曜日にロンドンを発ち、晩はパリで過ごす、マジック・シティ〔パリ市中のイベント会場〕で催される集会で話した後、われわれの友人ルイゼット・ギイエース宅に泊まる。日曜午前にターリテットに向けて出発し、そこには晩の六時に到着する。すでに真っ暗で、天気も良くないから、私の健康状態では迎えに出られない。(彼が我が家の客である間、私は外出することができないだろう——彼の帰国の日にヴィルヌーヴ駅まで送ってゆく以外には。)しかしエドモン・プリヴァ夫妻がパリまで迎えに行ってくれたし、妹がターリテットの駅で彼らを待ち受ける。ヴァロールブからこちらのスイス内の道中はお祭り騒ぎだ。ここでは、ニーハンスとペレの両博士が、ガンジー一行の滞在中彼らの車を使わせてくれる(だが彼のことから、車はわずかしか、あるいはまったく使わず、どこに行っても利用してきた一番質素な移動手段——鉄道の三等車を望むかもしれない)。(p. 307-308)

ガンジーは12月6日日曜日にヴィルヌーヴを訪れ、翌日からはロランとの間で連日長時間の対談が行われ、高田はそこに同席することを許されていたことが次の一文からも分かる。

この日の会談から、その後も同様に、日本人彫刻家高田が同席し、部屋の隅に無言で忘れられたようにして粘土の型取りをしていた。(p. 326)

またガンジーがヴィルヌーヴを去る前日、長い対談が終わる頃合いを見計らってロランが臨席者に献本をしたところでもその記述に高田の名前が見られる。

私はガンジーの若い弟子たちが抱く芸術への愛が実に深いことに驚いた。それだけになおさら、彼らが芸術から得られるであろう喜びを自らに断っていることが素晴らしい。しかし芸術愛の炎は絶えることなく彼らのうちに燃え続けている。——私はそういう若い人たちに贈るために、ミラに頼んで私の書棚から数冊の本を選んでもらった。

ピアラレル〔ガンジーの若いインド人従者〕には英語版の『ゲートとベートーヴェン』、デヴァダス〔ガンジーの若いインド人従者〕には英語版の『トルストイの生涯』。——ミラにはフランス語版の特製本『ベートーヴェン：偉大な創造の時期』。——ピアラレルとともにわれわれの会談に同席した高田にはフランス語の新版『ゲートとベートーヴェン』。

以上の引用を辿るならば、高田が『分水嶺』の中で回想するガンジーとの遭遇のエピソードとして語っていることがほぼすべてロランの日記によって証拠立てられることが分かる。さらにここにはもう一つ、未公表のロマン・ロラン自筆の書簡の中から筆者が発掘した一通をいわばダメ押しの物的証拠として示すことができるだろう。(フランス国立図書館ロマン・ロラン寄贈文書庫：Lettres de Romain Rolland à Takata, Fonds Romain Rolland, 8-1-2, 8-3-20)

1931年12月2日水曜日、ヴィルヌーヴ（ヴォー県）、ヴィラ・オルガ

親愛なる高田へ

【……】

ガンジーが次日の日曜（11月6日）〔RR自身の書き間違いで、正しくは12月6日〕にヴィルヌーヴにやってきて、11月11日〔正しくは12月11日〕金曜日の晩まで滞在します。彼とそのインド人の供の者たちのために、私が持っている二つの別荘の一つを彼らに使うてもらおうことにしました。

私は、多分あなたなら、ガンジーに出会って彼のクロッキーを幾つか描くことができたら嬉しいのではないかと思いました…（無論のこともしも彼が、私が期待しているように、あなたに許可してくれたら話ですが）。

ついてはこの封筒の中に百フランス・フラン三枚を入れておきます。その心は、「できたら、日曜の夜行列車でいらっしやい、月曜朝にはここに着きますから〔ディジョン——フラヌ——ヴァロールブ——ローザヌ——モントルー経由で〕」ということです。あなたはヴィルヌーヴのオテル・デュ・ノワジかオテル・デュ・ラックに宿をとって、ガンジーが発つまでの間そこにお泊まりなさい。その間5、6日間のあなたの出費は私が引き受けます。（パリーモントルー間の一週間くらいは往復切符が買えるかどうか聞いてごらんください。）

ただし良いですか、パリでは誰にもこのことは話さないでください〔下線は手稿のまま〕。なぜなら、どうして自分たちも招待してくれないのかとか、せめて自分をガンジーに紹介してくれないのかと私を責めるに違いない人が多過ぎるからです。そして私はそんなことはしたくないし、出来ません。私は出来るだけガンジーを誰にも邪魔させたくないし、ここ数カ月のロンドン滞在中で疲れきっている彼をそっと休ませてあげたいと思っているのです。

【……】

近いうちにあなたと握手出来ますように。

心より

以上によって高田とガンジーの出会いの真相が十分に明かされたと考えてよいだろう。ロマン・ロランが数多いパリの友人知己を差しおいて高田一人をスイスに招いてロランとガンジーの会談への同席を許したのは紛れもない事実だった。ただしロランが意図したのは高田にガンジーと議論させることではなく、無名の日本人彫刻家としての高田にその才能を試す絶好の機会を与えようとしたことだった。そして高田のパリでの貧しい暮らしぶりを知っていればこそ、ロランは高田に旅費を与え、さらに数カ月のロンドン滞在で疲れたガンジーの身に配慮して、パリの他の友人たちには内緒で来るようにと高田に指示を与えていたのだった。

回想録『分水嶺』の読者はこうしてロマン・ロランと高田との交流に関して、ロランの日記あるいは手紙というプライベートな領域に残された証言を発見することによって高田の回想の正確さや真実性を測ることができた。しかし今度は逆に、高田が回想録に残した言葉とロマン・ロランが日記などに残した言葉を対比することを通して、高田が自身では語らずにいた彼の体験が、ロランが残した証言から明らかになる、あるいは仄めかされるということも起こりうるのだ。

上に挙げたロランの日記からの引用は単行本*INDE*の中で高田に触れる箇所すべてであるが、ガンジーのロラン訪問に関わるロランの日記は1969年に刊行された*Gandhi et Romain Rolland*でもその期間の日記のすべてが再録されている。しかし実はそこには前者では故意に削除されていたと推測されるが、『分水嶺』の読者にとっては非常に重大な意味を持つ一節が加えられているのだ。それは上記の日記からの引用のうち、ロランが、ガンジーとの会談への臨席者に自著の献本をした時の記述に続く一節が存在していたのである。本の中での実際の箇所は本文末の図版として掲げるが、以下にフランス語の原文を転写し、次にその日本語訳を示す。

—— Ce cher Takata nous inspire une profonde sympathie. Encore plus concentré que Pyarelal, mais d'une nature plus rude, violente et orageuse, il a grand-peine à parler : il jette des syllabes saccadées, des ricanements ou des soupirs oppressés, on le sent souvent près d'éclater en cris ou en sanglots : alors, il refoule tout, et il halète : avec son épaisse crinière noire, il a l'air de je ne sais quel lion d'espèce inconnue, dessiné par Hokusai. Sa vie à Paris (ou à Clamart, à la lisière des bois), doit être une vie de misère noire, de détresse morale et de sauvage enthousiasme pour l'art. Il a été, voici quelques années, emprisonné au Japon, comme communiste ; et même on l'a torturé dans sa prison ; il montre, en riant d'un rire nerveux, un de ses doigts qui porte la marque des déformations causées par le fil de fer dont on l'avait ligoté jusqu'à le broyer. Il a laissé, au Japon, sa femme et des enfants, et leur situation doit être aussi critique que la sienne. À Paris, il n'ose pas se mêler aux milieux littéraires qui seraient les plus proches de sa pensée : car il est étroitement surveillé par sa propre ambassade et, au moindre soupçon de communisme, il serait dénoncé à la police française et expulsé. Il s'isole donc tout à fait dans son art ; et je ne sais pas comment il fait pour vivre ; je crois qu'il reçoit de loin en loin une petite somme d'argent du Japon ; mais depuis quelques mois, la crise qui sévit là-bas a suspendu les envois. Avec cela, très fier et refusant les secours que je lui offre. Je lui glisse dans sa poche, de force, un billet. Il est

près de suffoquer d'émotion ; il ravale ses larmes ; il ne parle pas, il fait de gros soupirs. Je lui dis adieu et je conviens qu'il reviendra, au printemps, pour faire mon buste. Il a eu trois séances pour celui de Gandhi ; et il paraît satisfait de sa maquette. (Cahiers Romain Rolland 19, *Gandhi et Romain Rolland, Correspondance, extraits du Journal et textes divers*, éd. Albin Michel, p.112-113)

(日本語訳)

——この親愛なる高田に対しては強く好感を覚える。ピアレラルよりもさらに一途だが、粗野で荒々しくて激しやすく、やっとの思いでフランス語を話す。音節はぎごちなく、自嘲気味に笑ったり胸苦しそうにため息をついたりするのを見ると、今にも叫び出すか泣き出すのではないかと思われることが度々あったが、土壇場で彼はすべてを呑み込んで押し殺したように喘いで見せる。豊かな黒いたて髪をはやした高田は、まるで北斎が描いたこれまで誰も見たことのない獅子の類といった趣だ。彼のパリでの生活（というよりむしろクラマールの森のはずれでの生活）は、暗鬱なる貧窮と精神的苦悩の中でありながら、芸術への激情に溢れているに違いない。彼は数年前に日本で共産主義者として投獄され、拷問さえ受けたことがあると言う。針金で折れるほどきつく縛られた指の一本に残る歪んだ跡を彼は神経質に笑いながら見せた。妻子を日本に残してきたそうだが、その暮らしぶりはきっと彼のパリ暮らしと等しくぎりぎりのものなのだろう。彼はパリにいながら、自分の思想にいくら近しくとも文学者仲間とは敢えて付き合おうとはしない。なぜなら彼に対しては自国の大使館がしっかり目を光らせていて、わずかでもコミュニスト臭いと疑われたら、フランスの警察に密告されて追放されてしまうからだ。だから彼は頑なに自分の芸術のなかに閉じこもっている。どうやって糊口を凌いでいるのか私は知らない。ときどきには日本から届くわずかな金を手にするのだろう。しかしここ数カ月はかの地も大恐慌のあおりを受けて仕送りが止まってしまったという。にもかかわらず、自尊心が高いので、私からの援助を受けたがらない。私が無理やり彼のポケットに札を一枚すべりこませると、彼は感極まって息をつまらせ、涙をこらえ、無言のまま、大きくため息をついた。私は彼に別れを告げたが、来年の春になったらまたここへ来て、私の胸像を作ってもらうことにしよう。彼はガンジーの胸像をつくるために三回ポーズをとってもらっていた。それで物にできたひな型に満足できたようなのだ。

この一節が*INDE* (1960) では削除されているが、*Gandhi et Romain Rolland* (1969) では復元された理由については、前者の編集者はこの一節はガンジーのロラン訪問には直接関係せずと判断したかもしれないが、後者ではガンジー訪問時のロランの日記の記述をすべて採録したのであると推測できる。『分水嶺』の読者にとって重要なことは、本論冒頭で触れた高田の3週間にわたる拘留中の特高による取り調べが拷問に等しかったのではないかと推測されること、そしてまた渡仏後のパリでの生活においても日本大使館からの監視の目があったということ、さらには貧困の中でありながら妻子を日本に残したままでフランス行きを敢行した経緯をロマン・ロランが正確に認識していた事実である。

高田博厚の人生において、非合法の日本共産党の革命運動の巻き添えを喰ったために、

留置場に拘留され取り調べを受けた経験は、彫刻家としての高田がいわば芸術修行の口実でフランス行きを決心する決定的なきっかけとなった。このまま日本にとどまっても将来的には自由な創作活動は保証されないと危惧したことだろう。そうであれば妻と三人の子供を残して日本を去ることもやむを得ないと感じたに違いない。そしてこのような経緯と動機に基づいてフランスに渡った高田にとっては、第二次世界大戦勃発に伴って日本に戻るということは、日本にいれば思想犯とみなされるのは不可避なのだから、敵国フランスに留まる以上に危険な選択肢だと思われたことだろう。だからこそ高田はナチスドイツによる占領下のフランスに留まり、戦争末期にベルリンに移送されて、ドイツ敗戦の結果難民扱いで苦難の収容所生活を送ることになって、2年後に自由の身となっても、日本へ帰国することはせず、ただ一人フランスはパリに戻る道を選んだのだろう。

20世紀初頭から両大戦間にわたってフランスに渡り活躍した日本人芸術家は数多いた。高田博厚もその一人だが、彼一人は第二次世界大戦中のドイツ占領下のフランスでの生活を実体験した稀な日本人となった。その高田の貴重な体験は彼の回想録『分水嶺』を読むことで読者の知るところとなるが、彼が回想録のなかでは語らなかった「若干の」事実がロマン・ロランの日記中の記述から浮かび上がってきた今、その人生の歩みを決定づけた「出来事」の重大さが改めて深く認識できるのである。

*本文中のロマン・ロランの日記および手紙からの引用はすべて筆者の拙訳である。

filles des écoles et la chorale de Villeneuve viennent lui donner (vers 9 heures du soir) une aubade, sous ses fenêtres de la villa Lionnette. On lui chante « le Ranz des Vaches » et les Indiens charmés sont persuadés que ceux qui chantent sont des vachers. (Nous ne les détrompons pas ; mais nous ne le ferons pas connaître aux chanteurs villeneuvois : ils ne savent pas que dans l'Inde Krishna fut le divin Vacher.)

Cependant, j'ai une assez longue conversation avec Pyarelal. Ma sœur s'étant trouvée avec lui, dans le wagon qui allait de Villeneuve à Genève, a su inspirer confiance à ce jeune homme, très concentré, qui a peine à se livrer, et dont les traits font mal deviner l'âme frémissante et douloureuse qu'il porte en lui. (Lui-même dit, avec tristesse : « Je n'attire pas, je repousse... ») Il en a été si reconnaissant qu'il lui a raconté toute sa vie ; et maintenant, le voilà parti, il nous dit tout, à cœur ouvert : son enfance élevée par un oncle d'une bonté paternelle, dont il a dû faire saigner le cœur, quand il a brisé son avenir et renoncé à toute situation, pour suivre Gandhi, à qui il est voué corps et âme. (Mais après bien des années d'éloignement, l'oncle, je crois, a fini par comprendre.) Et Pyarelal me dit aussi (ma sœur traduit) tout ce que mes livres ont été pour lui. D'abord, ma *Vie de Tolstoy*, dont certaines phrases ont été décisives pour lui : des coups de lumière. Puis, le *Jean-Christophe*, et les *Beethoven*. Je suis frappé combien ces jeunes disciples de Gandhi sont pénétrés de l'amour de l'art : d'autant plus beau est leur renoncement à toutes les jouissances que l'art leur donnerait ; mais la flamme brûle toujours en eux. — Mira a choisi, sur ma demande, plusieurs livres dans ma bibliothèque, pour que j'en fasse don à ces jeunes gens : — à Pyarelal, mon *Goethe et Beethoven* en anglais ; à Devadas, la *Vie de Tolstoy* en anglais. — A Mira, je donne la grande édition française du *Beethoven : les Epôques créatrices*. — A Takata, qui assiste à l'entretien avec Pyarelal, la nouvelle édition française de *Goethe et Beethoven*. ←

Le vendredi 11 décembre, jour du départ, Gandhi vient chez moi, de bonne heure, — après 9 heures. Et nous

avons un dernier entretien riche, affectueux et divers. D'abord, il est question de l'Italie. Gandhi a envoyé à Scarpa un télégramme précisant qu'il n'accepte de venir à la réunion de l'*Istituto di Cultura* que sous la condition qu'il sera libre de dire entièrement, et sur tous les sujets, sa pensée. — Quelques heures après, comme par hasard, lui est arrivé un télégramme de Gentile (qui devait présider cette réunion) : Gentile s'excuse de devoir s'absenter précisément les deux jours où Gandhi a annoncé sa présence à Rome. — On a compris qu'on ne pourrait exploiter Gandhi au bénéfice du fascisme, et que sa parole serait plus dangereuse qu'utile.

L'achève de renseigner Gandhi, en lui parlant du serment que le fascisme vient d'exiger des professeurs de la haute Université, et des protestations que publient contre ce serment une douzaine d'entre eux, les principales célébrités de la science universitaire en Italie. — Je parle aussi du Vatican, qui, maintenant, accepte le serment, avec des réserves jésuitiques.

— Ensuite, ma sœur l'entretient d'Oxford, qu'elle connaît bien et qu'elle aime. Gandhi dit les impressions de sa visite à Oxford... « Fine young men », conservateurs, mais généreux, et qui lui seront d'une certaine aide dans la lutte. Il dit que la beauté des universités d'Oxford, des bâtiments, des œuvres d'art, était ternie à ses yeux par la pensée de l'exploitation du monde, d'où ces richesses ont fleuri.

Au Lancashire, Gandhi a beaucoup apprécié les ouvriers du textile ; il les a trouvés très intelligents : « Ils parlaient avec un beau détachement. Ils auraient pu croire que je suis leur ennemi, puisque ma campagne de non-coopération les a ruinés. Mais je leur ai expliqué que la vraie cause de leur ruine n'est pas le boycottage indien : il y a des causes mondiales. Nous nous sommes quittés en complète amitié. Les patrons aussi ont été très gentils (« very nice »). Partout, une atmosphère amicale. »

« A Londres, Miss Lester m'a montré les quartiers pauvres, les « slums ». Mais, pour moi, ces pauvres avaient de la fortune ; leur mobilier valait bien 50 livres (!) ; certains avaient même un piano. » (Je soupçonne fort Miss Lester, qui a un amour-propre britannique très développé,

図版 1 : INDE, p.352-353, éd. Albin Michel, 1960

« Je n'attire pas, je repousse... ») Il en a été si reconnaissant qu'il lui a raconté toute sa vie ; et maintenant le voilà parti, il nous dit tout, à cœur ouvert : son enfance élevée par un oncle d'une bonté paternelle, dont il a dû faire saigner le cœur, quand il a brisé son avenir et renoncé à toute situation, pour suivre Gandhi, à qui il est voué corps et âme. Mais après bien des années d'éloignement, l'oncle, je crois, a fini par comprendre. Et Pyarelal me dit aussi (ma sœur traduit) tout ce que mes livres ont été pour lui. D'abord, ma *Vie de Tolstoy*, dont certaines phrases ont été décisives pour lui : des coups de lumière. Puis, le *Jean-Christophe*, et le *Beethoven*. Je suis frappé combien ces jeunes disciples de Gandhi sont pénétrés de l'amour de l'art : d'autant plus beau est leur renoncement à toutes les jouissances que l'art leur donnerait ; mais la flamme brûle toujours en eux. — Mira a choisi, sur ma demande, plusieurs livres dans ma bibliothèque, pour que j'en fasse don à ces jeunes gens : — à Pyarelal, mon *Goethe et Beethoven* en anglais ; à Devadas, la *Vie de Tolstoy*, en anglais. — A Mira, je donne la grande édition française du *Beethoven : les Epôques créatrices*. — A Takata, qui assiste à l'entretien avec Pyarelal, la nouvelle édition française de *Goethe et Beethoven*.

← Ce chez Takata nous inspire une profonde sympathie. Encore plus concentré que Pyarelal, mais d'une nature plus rude, violente et orageuse, il a grand-peine à parler : il jette des syllabes saccadées, des ricanements ou des soupirs oppressés, on le sent souvent près d'éclater en cris et en sanglots : alors, il refole tout, et il halète : avec son épaisse crinière noire, il a l'air de je ne sais quel lion d'espèce inconnue, destiné par Hokusai. Sa vie à Paris (ou plutôt à Clamart, à la lisière des bois), doit être une vie de misère noire, de détresse morale et de sauvagement enthousiasme pour l'art. Il a été, voici quelques années, emprisonné au Japon, comme communiste ; et même on l'a torturé dans sa prison ; il montre, en riant d'un rire nerveux, un de ses doigts qui porte la marque des déformations causées par le fil de fer dont on l'avait ligoté jusqu'à le brayer. Il a laissé, au Japon, sa femme et des enfants, et leur situation doit être aussi critique que la sienne. A Paris, il n'ose pas se mêler aux milieux littéraires qui seraient les plus proches de sa pensée ; car il est étroitement surveillé par sa propre ambassade et, au moindre soupçon de communisme, il serait dénoncé à la police française et expulsé. Il s'isole

donc tout à fait dans son art ; et je ne sais pas comment il fait pour vivre ; je crois qu'il reçoit de loin en loin une petite somme d'argent du Japon ; mais depuis quelques mois, la crise qui sévit là-bas a suspendu les envois. Avec cela, très fier et refusant les secours que je lui offre. Je lui glisse dans sa poche, de force, un billet. Il est près de suffoquer d'émotion ; il ravale ses larmes ; il ne parle pas, il fait de gros soupirs. Je lui dis adieu et je conviens qu'il reviendra, au printemps, pour faire mon buste. Il a eu trois séances pour celui de Gandhi ; et il paraît satisfait de sa maquette.

Le vendredi 11 décembre, jour du départ, Gandhi vient chez moi, de bonne heure, — après 9 heures. Et nous avons un dernier entretien, riche, affectueux et divers.

D'abord, il est question de l'Italie. Gandhi a envoyé à Scarpa un télégramme précisant qu'il n'accepte de venir à la réunion de l'*Istituto di Cultura*, que sous la condition qu'il sera libre de dire entièrement, et sur tous les sujets, sa pensée. — Quelques heures après, comme par hasard, lui est arrivé un télégramme de Gentile (qui devait présider cette réunion) : Gentile s'excuse de devoir s'absenter précisément les deux jours où Gandhi a annoncé sa présence à Rome. — On a compris qu'on ne pourrait exploiter Gandhi au bénéfice du fascisme, et que sa parole serait plus dangereuse qu'utile.

L'achève de renseigner Gandhi, en lui parlant du serment que le fascisme vient d'exiger des professeurs de la Haute Université, et des protestations que publient contre ce serment une douzaine d'entre eux, les principales célébrités de la science universitaire en Italie. — Je parle aussi du Vatican, qui, maintenant, accepte le serment, avec des réserves jésuitiques.

— Ensuite, ma sœur l'entretient d'Oxford, qu'elle connaît bien et qu'elle aime. Gandhi dit les impressions de sa visite à Oxford... « Fine young men », conservateurs, mais généreux, et qui lui seront d'une certaine aide dans la lutte. Il dit que la beauté des universités d'Oxford, des bâtiments, des œuvres d'art, était ternie à ses yeux par la pensée de l'exploitation du monde, d'où ces richesses ont fleuri. Au Lancashire, Gandhi a beaucoup apprécié les ouvriers du textile ;

図版 2 : Gandhi et Romain Rolland, p.112-113, éd. Albin Michel, 1969 (実線囲み部分が1960年版のINDEには記載されていなかった。図版1中←に続く)